

中国古典文学大系 28

平凡社

水滸伝 上

施耐庵作 駒田信二訳

訳者紹介

こまだしんじ
駒田信二 1914年三重県生。1994年没。東京大学文学部卒。専攻 中国文学。主著 『新墨子物語』(河出書房)『対の思想』(勤草書房)『島』(筑摩書房)『今古奇観』『棠陰比事』(平凡社「中国古典文学大系」)

中国古典文学大系 全60巻

水滸伝(上)

第28巻

1967年10月5日 初版第1刷発行
1998年2月27日 初版第17刷発行

76000

訳者 駒田 信二

発行者 下 中 弘

発行所	郵便番号 152-0003 東京都目黒区 碑文谷5-16-19 振替・00180-0-29639	株式会社 平 凡 社
-----	---	---------------

乱丁・落丁本のお取換えは直接読者サービス係 印刷 東洋印刷株式会社
までお送り下さい(送料は小社で負担します)。製本 株式会社 石津製本所
定価は外箱に表示してあります。

© 株式会社 平凡社 1967 Printed in Japan

ISBN4-582-31228-4

目 次

引 首 三

第一回 六

張天師 祈つて瘟疫を禳い
洪太尉 誤つて妖魔を走す

第二回 一五

王教頭 私かに延安府に走れ
九紋竜 大いに史家村を鬧がす

第三回 二五

史大郎 夜華陰界を走れ
魯提轄 拳もて鎮関西を打つ

第四回 三六

趙員外 重ねて文殊院を修め
魯智深 大いに五台山を鬧がす

第五回 四六

小霸王 酔つて銷金帳に入り
花和尚 大いに桃花村を鬧がす

第六回 五七

九紋竜 赤松林に剪徑し
魯智深 瓦罐寺を火烧す

第七回 六八

花和尚 倒に垂楊柳を抜き
豹子頭 誤つて白虎堂に入る

第八回 七〇

林教頭 滄州道に刺配せられ
魯智深 大いに野猪林を鬧がす

第九回 七九

柴進 門に天下の客を招き
林冲 洪教頭を棒打す

第十回 八三

林教頭 風雪に山神廟へ
陸虞候 草料場を火烧す

第十一回 八三

朱貴 水亭に弓箭を施ち
林冲 雪夜に梁山へ上る

第十二回

梁山泊に
汴京城に
林冲落草し
楊志刀を売る

一四

第十三回

急先鋒、東郭に功を争い
青面獣、北京に武を闘わす

一五

第十四回

赤髮鬼、酔って靈官殿に臥し
晁天王、義を東溪村に認む

一六

第十五回

呉学究、三阮に説いて撞簪し
公孫勝、七星に応じて義に聚まる

一七

第十六回

楊志、金銀担を押送し
呉用、生辰綱を智取す

一八

第十七回

花和尚、単にて二竜山を打ち
青面獣、双して宝珠寺を奪う

一九

第十八回

美髯公、智もて挿翅虎を穩め
宋公明、私かに晁天王を放つ

二〇

第十九回

林冲、水寨に大いに火を併ち
晁蓋、梁山に小しく泊を奪う

二三

第二十回

梁山泊に、義士晁蓋を尊とし
鄆城縣に、月夜劉唐を走らす

二四

第二十一回

凌婆、酔って唐牛児を打ち
宋江、怒って閻婆惜を殺す

二五

第二十二回

閻婆、大いに鄆城縣を鬧かし
朱仝、義もて宋公明を釈す

二六

第二十三回

横海郡に、柴進賢を留め
景陽岡に、武松虎を打ち

二七

第二十四回

王婆、賄を貪って風情を説き
鄆哥、不いに忿って茶肆を鬧がす

二八

第二十五回

王婆、計もて西門慶を唆かし
淫婦、薬もて武大郎を鴆す

二九

第二十六回 骨殖を偷みて 何九叔喪を送り
人頭を供えて 武二郎祭を設く 三三

第二十七回 母夜叉 孟州道に人肉を売り
武都頭 十字坡に張青に遇う 三八

第二十八回 武松 威もて安平寨に鎮め
施恩 義もて快活林を奪う 三八

第二十九回 施恩 重ねて孟州道に覇たり
武松 酔って蔣門神を打つ 三七

第三十回 施恩 三たび死囚牢に入り
武松 大いに飛雲浦を闘がす 三六

第三十一回 張都監 血鷄窩楼に瀝ぎ
武行者 夜蜈蚣嶺を走る 三六

第三十二回 武行者 酔って孔亮を打ち
錦毛虎 義もて宋江を釈す 三九

第三十三回 宋江 夜小寨山を看
花榮 大いに清風寨を闘がす 四〇

第三十四回 鎮三山 大いに青州道を闘がせ
霹靂火 夜瓦礫場を走る 四〇

第三十五回 石將軍 村店に書を寄せ
小李広 梁山に雁を射る 四三

第三十六回 梁山泊に 呉用戴宗を挙げ
掲陽嶺に 宋江李俊と逢う 四六

第三十七回 没遮欄 及時雨を追趕し
船火児 夜潯陽江を闘がす 四六

第三十八回 及時雨 神行太保に会い
黑旋風 浪裏白跳と闘う 四三

地 図 四八九

解 説 四九一

水^{すい}

滸^こ

伝^{でん}

上

駒^{こま} 施^し

田^で 耐^た

信^{しん}

二^に 庵^{あん}

訳 作

詞

試みに雪の林の隠き処を看れば、幾多後逸なる儒流の、名を虚しくし利を薄んじて愁に閑せず、氷を裁ちまた雪を剪り、談笑して興鉤を看、評議するは、前王と後帝の、真偽を分かつて中州を占拠し、七雄の擾々として春秋を乱るを、興亡は脆き柳の如く、身世は虚しき舟に類る。見よ、名を成せるもの無数、名を図りしもの無数、更に名を逃るもの無数有るも、霎時にして新月は長江を下り、江湖は桑田古路に変ずるを。魚を求めて木に縁るを訝り、窮狼の木を扱ひ、弓に傷つけらるるを恐れて曲木に遠ざかるを擬しむよりは、如かず、且く掌中の杯を覆せて新しき声の曲度を聴取せんには。

詩

紛々たる五代 乱離の間
一旦雲開けて復び天を見る
草木百年 新たなる雨聲
車響万里 旧りし江山

尋常の巻陌 羅綺を陳ね

幾処の楼台 管絃を奏す

人は樂しむ太平無事の日

驚花限くことなく日高くして眠る

さてここにあげた八句の詩は、今は昔、宋は神宗皇帝の御代に聞こえ高かりし名儒、姓は邵、名は堯夫、道号を康節先生という人の作で、唐は末世の五代、兵乱にあげられた世を嘆いてうたったもの。そのころは朝には梁の天下が夕には晋の世と変わるめまぐるしきで、まさに「朱・李・石・劉・郭・梁・唐・晋・漢・周、あわせきたつて十五帝、乱れ乱れて五十年」というありさまであったが、やがて、天道おのずからめぐりきたつて、洛陽は甲馬宮の陣中に太祖武德皇帝のご誕生となったのである。この天子ご誕生のみぎりには、赤光が空に輝き、芳香が夜もすがらたちこめたが、これぞ天上界の霹靂大仙の降臨であった。猛く雄々しく、才智すぐれ度量ゆたかに、古来のどの帝王もこの天子の右に出る方とてない。身の丈にひとしい一本の樺棒をもって四百余州を討ち平らげ、みなわがものとされたのである。天子は四海を鎮め中原を平らげるや、国号を大宋と名づけて汴梁（開封）に都を建て、九朝八帝（宋朝十七代）の祖、四百年の御代の開元の君主となられたのである。邵堯夫先生が、「一旦雲開けて復び天を見る」と讃美したのは、このためであつて、天下の民草がおかげでふたたび天目を仰ぎ見ることができるようになったという謂にほかならぬ。

そのころ、西嶽の華山に陳搏という処士（官につかない士）がいた。行いたらしい有徳の人で、天下の形勢を見る遠眼をそなえていたが、ある日驢馬に乗つて山をくだり、華陰（華山の北）の道を通っていると、きのこと、ふと旅人たちのうわさばなしを耳にした。

「東京ではこんど柴世宗（後周の天子）さまが讓位なさって、趙檢点（趙匡胤、すなわち宋の太祖）さまが即位されたそうだ」

陳搏先生はそれを聞くと、心に快哉を叫び、額をたたいて驢馬の背なかでうち笑ったとたんに、驢馬からころがり落ちてしまった。どうしたことかとたずねられて、先生のいうには、

「天下はこれで太平になる」

まさしく、上は天の心にかない、下は地の理にあい、中は人の和になつたというもの。庚申の年に讓位をうけ、国の基をひらいて位に即かれてから在位十七年、天下は太平無事であつた。ついで位は御弟の太宗に。太宗皇帝は在位二十二年、やがて真宗があとをつがれ、真宗皇帝はさらに仁宗に位を譲られた。

この仁宗皇帝こそ、仙界の赤脚大仙である。ご生誕の当座は、夜も昼も泣きつづけておられたので、朝廷では治療する者を求めて、揭示を出された。それが天宮に通じて、太白金星がこの世につかわされたのである。金星は翁に姿を変え、歩みよって揭示の紙をひきはがし、太子のおむすかりを、おなおいしたしましうと申し出た。揭示の見張り役人が翁を宮中へともない、真宗皇帝にお目通りさせると、天子からお言葉があつて、大奥へ通つて太子を診よとおおせ。翁はずっと大奥へ通り、太子を抱きあげてその耳もとでひそやかに八字をささやく。と、たちまち、太子は泣きやまれたのである。翁は名もいわず、一陣の清風と化して去ってしまったが、耳もとでささやいたその八字というのは、

文有文曲 武有武曲

その言葉にたがわず、玉帝（天帝）は紫微宮（天宮）の二つの星を下

界にくだしてこの天子をたすけさせられた。文曲星は、南衙すなわち開封府の長官、龍圖閣・天章閣・太史閣の包拯であり、武曲星は、西夏国征討軍の大元帥たる狄青である。

このふたりの賢臣があらわれて天子をおたすけたのである。在位四十二年、その間に九度年号が改められた。天聖元年、癸亥のご即位から天聖九年にいたるまでの間は、天下は太平で五穀はゆたかにみどり、民草はみな業をたのしみ、道に落ちたるを拾うものなく、夜も戸をとざす家なしというありさま。この九年間を一の登という。ついで明道元年から皇祐三年まで。この九年間も豊年つづきで、これを二の登という。皇祐四年から嘉祐二年まで。この九年間もまたみのりゆたかで、これが三の登。こうして年々相つづいて三九二十七年、この間を三登の世というのである。

かくて民草は楽しい日々を送り迎えていた。ところが、はからずもここに、樂しみの果てに悲しみが生じたのである。嘉祐三年の春さき、天下に悪疫が流行し、江南から東西の兩京（開封と洛陽）にかけて、この民草もこの病におかされぬものはなく、天下の各州各府から雪の降りしきるように奏上文が舞いこむ始末。

東京とはいえば、これも城内城外の軍民の大半が死亡するありさまで、開封府長官の包拯は、惠民和濟局方（太医者の定めた薬法）にしたがつて、自分の俸禄をなげうって薬を調合し、万民の救済にあたつた。だがその甲斐もなく疫病はつるのばかり。文武の百官は協議し、待漏院（宮中の控えの間）により集まって、朝見のおり奏聞におよんだ。「もはやこれは、祈禱によってこの悪疫をはらいきよめるよりほかございせん」

このことのあつたためにこそ、三十六員の天監星がこの世に臨み、七十二座の地煞星が下界におりきたって宋国の乾坤をうちゆすぶり、

趙家（宋室は趙氏）の社稷を大波乱に巻きこむことになったのである。そのことをうたった詩がある。

万姓熙々たり化育の中

三登の世 樂しみ窮まりなし

豈知らんや礼樂笙鏞の治

變じて兵戈劍戟の叢と作らんとは

水滸塞中 節俠屯し

梁山泊内 英雄聚う

細かに治乱興亡の数を推れば
尽く陰陽造化の中に属す

注

一 呉鉤 鉤は鉤刀。さきの曲がった剣。「呉越春秋」に次のような話がある。呉王闔閭は名剣莫邪を持つていたが、さらに鋭利な鉤刀を國中に求めた。呉には鉤刀を作る者が多くいたが、なかの一人は王の重賞を得ようとして、自分の子二人を殺し、その血を刃に塗りこめて二ふりの鉤刀を作り王に献上した。呉鉤とはすなわち呉の鉤刀。のち鋭利な剣の意味につかわれるにいたった。「談笑して呉鉤を見る」とは、談笑しつつ血なまぐさい歴史を論議するという意味。

二 魚を求めて木に縁る 「孟子」梁惠王篇に、斉の宣王に対して孟子が、武力で天下の統一をはかろうとするのは「なお木に縁りて魚を求むるがごとし」といったことが見える。求むべからざることのたとえ。

三 窮狼の……曲木に遠さかる 「晋書」に「窮狼の林に奔る、豈木を拒ぶに暇あらんや」とある。ここではそれを逆に用い、窮狼が木を拒び、弓の形をした曲木を避けるとして、容易にあり得べからざることになしたものである。

四 朱・李・石・劉…… 朱は朱全忠、梁（六七—九三）の太祖。李は李存勖、唐（三三—六〇）の莊宗。石は石敬瑭、晋（六六—九六）の高祖。劉は劉知

遠、漢（六六—九六）の高祖。郭は郭威、周（一六—一七）の太祖。このかゝる五代といひ、約五十年。帝を称したもの、梁は三人、唐は五人、晋は三人、漢は二人、周も二人、あわせて十五帝である。

五 趙檢点 檢点はまた点檢という。五代から宋にわたって置かれた官名で、近衛軍の長官。趙匡胤の官名は殿前都点檢であつた。

六 電圖閣大學士 電圖閣は眞宗の大中祥符年間（一〇六—一〇七）に建てられ、太宗の御書や文集、また書籍・書画・宝物などを収めた。宋の制度では、殿には學士と大學士を置き、閣には學士と直學士を置いた。包待制 待制は侍從顧問官。宋では各殿閣にこの官を置いた。その地位は大學士・直學士よりも低い。包拯は開封府長官と待制とを兼ねていたため、「開封府長官の包待制」と官名で呼んだわけである。

第一回

張天師 折って瘟疫を禳い
洪太尉 誤って妖魔を走す

大宋の仁宗皇帝の御代、嘉祐三年三月三日の朝五更三点(四時)、天子は紫宸殿に出御あらせられ、百官の朝賀をお受けになった。

祥雲は鳳閣に迷い、瑞氣は竜樓に罩む。煙を含んで御柳は旌旗を払い、露を帯びて宮花は劍戟を迎う。天香の影裏、玉簪朱履は丹墀に聚い、仙樂の声中、繡襖錦衣は御駕を扶く。珍珠の簾捲かれて、黄金殿上に金鑾を現わし、鳳羽の扇開かれて、白玉階前に宝輦を停む。隠々として淨鞭三下響き、層々として文武両班斉う。

そのとき殿頭官(宮廷侍従の官)がよばわった。

「奏上の儀あらば、列を出て早々に申されますよう。なければこれにておひらきといたします」

すると、居並ぶ列の中から宰相の趙哲と参政(参議官)の文彦博とがすすみ出て奏上した。

「いまや京師には悪疫流行し、軍民の病にたおれるもの数知れぬありさまでございます。ねがわくは陛下には、罪人をゆるして聖恩を垂れ、刑をはぶき税をゆるめ、天災を祈りはらって、万民を救わせたまいますよう」

天子はそれを聞こしめされると、翰林院に、ただちに詔を起草す

るようご下命になり、天下の罪人には大赦の恩典をくだし、民間の税賦はいっさい免除されるとともに、都じゅうの宮觀(道教の寺)や仏寺に悪疫退散の祈願をおこなうようおせられた。ところがその年疫病はますます猖獗をきわめるばかりであった。

仁宗皇帝はそのことを聞こしめして御心を悩ませられ、ふたたび百官を集めて協議された。するとそのとき、一同のなかからひとりの大臣がすすみ出て奏上した。天子がごらんになると、それは参知政事(参政)の范仲淹で、まずご機嫌を奉伺してから、こう奏上した。

「いまや疫病は猖獗をきわめて、軍民は塗炭の苦しみにあえぎ、一日とて心のやすまる日はありません。わたくしの考えますには、この災いをはらうためには、嗣漢天師を急遽お召し出しになり、宮中にて三千六百分の羅天醮(星祭り)をいとなんで、天帝に祈願をこめられますよう。そうすれば民間の悪疫をはらいのけることができようかと存じます」

仁宗皇帝は聞こしめされて、急ぎ翰林学士に詔勅を起草せしめられ、それを天子みずから滑書されて、御香一炷を添え、内外の提点(治安警護を司る官)たる殿前の太尉(大將軍)洪信を勅使として、江西は信州の竜虎山(道教の大本山)へつかわし、嗣漢天師の張真人に、ただちに参内して悪疫をはらうよう命ぜしめられることになった。かくて金殿にて御香を焚き、天子みずから洪太尉に詔書をさずけて、ただちに出發するようおせられた。

洪信は御意をうけて天子においとまごいを申しあげると、詔書を背負い御香を盒に盛り、数十人の供を従え、駅馬にうち乗って東京をあとに、一路信州は貴溪県へとめざす。うち見れば、

遙かなる山は暈なりて翠に、遠き水は澄みて清く、奇しき花は

綻びて錦繡もて林に鋪き、嫩き柳は舞つて金糸もて地を払う。風和かく日暖かに、時に野店山村を過ぎ、路直に沙平らかに、夜は郵亭駅館に宿る。羅衣は紅塵の内に蕩漾し、駿馬は紫陌の中を駆馳す。

さて太尉の洪信は、詔書をたずさへ従者をうち連れて旅路をかさね、やがて江西は信州についた。役人たちはみな城外に出迎える一方、すぐに人をつかわして竜虎山上清宮の住持や道士たちに知らせ、詔書奉迎の準備をさせた。翌日、役人たちは太尉を竜虎山の麓まで送って行った。と、上清宮の多くの道士たちは、鐘を鳴らし太鼓を叩き、香花燈燭をつらね、幢幡や天蓋をおしならべ、仙樂を奏でながら、みな山をおりて詔書を出迎えた。やがて上清宮の前まできて下馬し、太尉がその社殿をうち眺めるに、ききしにまさる上清宮。そのさまは、

青松は屈曲し、翠柏は陰森たり。門には勅額の金書を懸け、戸には靈符の玉篆を列ぬ。虚皇の壇の畔、垂柳名花依稀に、煉梁の炉の辺、蒼松老檜掩映す。左の壁廂には天丁・力士、太乙真君に参随し、右の勢下には玉女・金童、紫微大帝を簇捧す。髪を抜き剣に伏つて、北方真武は亀蛇を踏まえ、履を靱き冠を頂いて、南極老人は竜虎を伏う。前には二十八宿の星君を排し、後には三十二帝の天子を列す。増砌の下には流水潺湲とし、墻院のうしろには好山環繞す。鶴は丹頂を生き、亀は緑毛を長し、樹梢には果を献げる蒼猿あり、莎草には芝（靈芝）を銜める白鹿あり。三清殿上には金鐘を撃つて道士虚を歩み、四聖堂前には玉磬を敲らし、真人斗を礼む。香を献ずる台砌には彩霞の光、碧瑤璃を射、将（道教の武神）を召す瑤壇には赤日の影、紅瑤璃に揺らぐ。早来に

は門外に祥雲現わる、疑うらくは天師の老君を送るか。

そのとき、住持の真人から童子や従者にいたるまでみな、それぞれ前後につき従つて三清殿に請じ入れ、詔書を奉戴して殿の中央に安置した。

洪太尉はさつそく監宮（取締り。住持に同じ）の真人にたずねた。

「天師は今どこにおいでかな」

住持の真人がすすみ出て、

「申しあげます。当代の祖師は号を虚清天師と申し、いたつて超俗なお方で、世事にかかわることを好まれず、竜虎山の上に茅の庵を結んでそこで修行しておられます。従つてここにはおられません」

「このたび天子より詔があつたのだが、どうしたらお会いできるかな」

「おそれながら、ひとまずご詔勅は殿中に安置しておかれましては、

もとよりわたくしども決して開読したりなどはいたしません。まあ方丈の方でお茶でも召しあがっていただきまして、それからのことにといたしましょう」

そこで詔書は三清殿に安置したまま、みなは方丈へさがった。太尉が座につくと執事人（接待係）らが茶をすすめ、ついで海山の幸のそなわった齋が出された。お齋がすすむと、太尉はふたたび真人にたずねた。「天師が山頂の庵におられるとならば、使いの者をやつてお連れ申せばよろう。これでは詔勅の開読ができぬではないか」

「祖師さまは山頂におられるとは申せ、なにしろ道行の非凡なお方で、霧に乗り雲を起として方々へ行かれますので、わたくしども、めったにお目にかかることもかなわぬしだいで、使いをやつておよびしてくることなどとてもできません」

「それではとても会えそうにもないな。いま京師ではひどく疫病がはやっているの、今上陛下にはそれがしを特使に立てられ、ご親筆の詔書と御香をもって天師のおいでをねがい、三千六百分の羅天大醮をいとなんで天災をはらい、万民を救おうとの思しめしなのだ。はてさてこれではどうしたものか」

「天子さまには民草を救おうとの思しめしならば、まずあなたさまがまごころをあらわし、齋戒沐浴して布衣（清浄な衣服）を着、従者などは連れず、詔書を背負い御香を焚いておひとり山へ登り、ぬかずいて天師におねがいなさるよりほかありません。そうすればお会いすることもできましよう。もしまごころもなく、ただおいでになっただけでは、とてもお目にはかかれますまい」

「わしは京師からずっと精進で通してきた。まごころがないといわれるふしはない。それでは、おまえのいうとおりにして、明朝早く山へ登ることにいたそう」

その夜は一同眠りについた。あくる日、道士たちは明けがたに起き出て湯をわかし、太尉を起こして沐浴をさせた。上から下まで新しい布衣に換え、麻の草履をはき、精進のお齋をすませると、太尉は詔書を黄色い羅の袂紗におさめて背負い、銀の手炉を提げ、つつしんで御香をくゆらしつつ、あまたの道士に裏の山まで送られて、そこから先の道すじを教えられた。真人はかさねていう。

「太尉どの、万民を救おうとなさるならば、不退転の心をもってひたすらまごころをつらぬかれますように」

太尉はみなと別れ、天尊の御名を口に唱えつつひたむきに山を登って行った。中腹まで登って見上げると、山頂はすくくとそそり立って九天をしのぐかと思われるばかり。聞きしにまさる大山であった。まさに、

根は地角に盤り、頂は天心に接す。遠くより観れば乱雲の痕を磨断し、近くより看れば明月の魄を平吞す。高低等しからざるを山と謂い、石に側いて路の通じたるを岫と謂い、孤嶺の崎嶇たるを路と謂い、上面の平極なるを頂と謂い、頭円くして下の壮なるを巒と謂い、虎の隠れ豹の蔽めるを穴と謂い、風の隠れ雲の隠るるを巖と謂い、高人の隠れ居るを洞と謂い、境あり界あるを府と謂い、樵人の出没するを徑と謂い、能く車馬を通し得るを道と謂い、流水の声あるを澗と謂い、古き渡の源頭を溪と謂い、巖屋の滴水を泉と謂う。左壁掩となれば右壁は映となる。出するはこれ雲、納るはこれ霧。錐尖の像く小きあり、崎峻の似く峭るあり、空に懸れる似く険なるあり、臘を削れる如く平らなるあり。千峰は秀を競い、万壑は流を争い、瀑布斜に飛び、藤蘿は倒に掛る。虎の嘯くとき風は谷口に生じ、猿の啼くとき月は山腰に墜つ。恰も似たり、青黛の染め成す千塊の玉、碧紗の籠め罩む万堆の煙に。

洪太尉はただひとりけわしい徑をすすみ行き、つたをよじかずらにすがりながらいくつかの尾根を越えて、二三里（およそ六里が日本の一里にあたる）あまりも行かうちに、もう脚がくたくたになって動けなくなり、口には出さなかったが、腹の中では二の足を踏んで、思うよう「わしは朝廷の高官だ。京師におればしとねをかさねて寝、器を並べてくらい、しかもなお心たれりとはせぬ身なのに、草鞋ばきで、こんな山路を歩かされようとは。天師のいどころがわからぬばかりに、こんなうきめにあわねばならぬわ」

また歩き出して四五十歩も行かぬうちにもう肩で息をはずませるし

まつ。と、そのとき、山間からさつと風が吹きおこり、その吹き去るあたり、松の木のむこうから雷鳴のような咆吼一声、やおら躍り出てきたのは、眼のつりあがった白額、錦の毛並の虎一匹。洪太尉は胆をつぶし、アッと叫んで仰のけざまにひっくりかえった。うす目をあけておそれるおそれるその虎を見れば、

毛は抜かす一帯の黄金色

爪は露わす銀鈎の十八隻

睛は閃電の如く尾は縷の如く

口は血盆に似て牙は戟に似たり

腰を伸ばし臂を張って勢い猙獰

尾を擺り頭を揺って声霹靂

山中の狐鬼 尽く潜み藏れ

淵下の猱磨みな迹を斂む

虎は洪太尉を見やりながら行きつもどりつして、しばらく咆えたてていたが、やがてぱつと身を躍らせてうしろの山路へ駆けおりて行った。洪太尉は木の根もとにうち倒れたままおそろしさのあまり上下三十六本の歯をがちとかがみあわせ、胸の早鐘はまるで十五六個の釣瓶桶の上下するような乱調子。全身は中風病みのようになえしびれ、両脚は蹴合いに敗けた雄鶏のよう。口はただ悲鳴をあげるばかり。

虎が去ってしばらくしてから、ようやくはい起きた太尉は、放り出した香炉をひろいあげてまた御香を焚き、天師に会うべくふたたび山を登りはじめた。四五十歩も行くと、しきりに溜息をついて、怨みがましく。

「陛下が特別の思しめしでこんなところへわしを遣わされたばかりに、

おそろしい目にあわされるわい」

といいもあえず、またしてもあたりに風がおこって、毒気を吹きつけてくるのを覚えた。太尉がはっとして見据えると、かたわらの茂みがざわざわと鳴って、釣瓶のような太さの、真白な蛇がぬつとあらわれた。太尉は見るなりアッとおどろき、手炉を放り出して、

「もうだめだ！」

と叫ぶなり、うしろざまに盤陀石（螺旋形の石）のかげに倒れたが、そつとうす目をあけてその蛇を見れば、

首を昂ぐれば驚駭起り、目を掣けば電光生ず、動蕩すれば則ち峽を圻き岡を倒し、呼吸すれば則ち雲を吹き霧を吐く。鱗甲は乱れて千片の玉を分かち、尾梢は斜に一堆の銀を捲く。

大蛇はするとと盤陀石のそばへよつてくると、洪太尉のまん前でとぐろを巻き、両眼から金色の光をはなち、大きな口をあげて舌を吐きながら、毒気を洪太尉の顔に吹きつける。太尉は仰天して魂魄もぬけ去るような思い。蛇はしばらく洪太尉をにらみつけていたが、やがてすると麓の方へすべりおりて行き、見えなくなってしまう。太尉はやつとはい起きて、

「やれやれ助かった。まったくびびくりさせやがる！」

身には銷釘（うどん粉で作った菓子的一種）のような鳥肌が立っている。ぶつぶつとかの道士をののしって、

「けしからん。おれを愚弄して、ひどい目にあわせやがって。もし山頂で天師に会えなかったら、おりてから目にも見せてくれよう」

ふたたび銀の提げ香炉を拾い、身につけた詔書や衣服・頭巾などをととのえて、また登ろうとした。さて足を踏み出そうとしたとき、松

の木のむこうからかすかに笛の音が聞こえてきた。それはしだいに近づいてくる。太尉がじっと見つめていると、ひとりの童子が黄牛に横乗りして鉄笛を吹きながら、山の鼻から姿をあらわした。見れば、

頭には両枚のY髻びんずを結むすみ、身には一領の青衣を穿きち、腰間の緋結くみひは草もて編み、脚下の芒鞋ばうしは麻もて間隔あひだる。明眸皓齒めいぼうこうし、飄々ひょうひょうとして並に塵埃ちんあいに染まず、緑鬢朱顏りくぱんしゆげん、耿々けいけいとして全く俗態なし。

かつて、呂洞賓りうどうひんに牧童ぼくどうをうたった詩があつて、なかなかよくできている。

草は横野に鋪しく六七里

笛は晚風に弄もよほる三四声

帰かへり来きつて飯に飽あく黄昏たふしの後

蓑衣すゐいを脱ぬせずして月明げつめいに臥ふす

童子は黄牛の背でにこにこ笑いながら、鉄笛を吹き鳴らしつつやってくる。洪太尉はそれを見て声をかけた。

「どこからきたのか。わしを知っておるか」

童子はそ知らぬふりで、笛を吹きつづけている。太尉が何度もよぶと、童子ははははと笑い、鉄笛で洪太尉を指さして、

「天師さまに会いたくてやってきたんだらう」

「牧童のくせに、どうしてわかるのか」

太尉がびっくりしてそういうと、童子は笑いながら、

「朝がた草庵で天師さまのご用をしていたとき、天師さまがおっしゃったよ。今上陛下には、洪という太尉を、詔書と御香を持たせて、こ

の山中へつかわされ、わたしに、東京へ出て三千六百分の羅天大醮をいとなんで天下の悪疫をはらえとのおおせだ、わたしはこれから鶴に乗り雲を駆かって行いつてくるとな。いまごろはもうお出かけになったあとで、庵にはおられまいから、登るのはおよしなされ。山には毒虫や猛獣がいっぱいいるから命があぶなからうよ」

「出まかせをいうでないぞ」

と太尉が念をおすと、童子はうふと笑ったきり、もう答えず、鉄笛を吹きながら坂路を去さつて行いつた。太尉は思案した。

「あの小僧はどうして何もかも知っているのだらう。天師がいつけたのだらうか。そうにちがいない」さらに登ろうとしたが、「たった今、ひどい目にあつて、すんでのことで命をおとすところだったのだ、ひきかえした方がよさそうだわい」

太尉は掲げ香炉を手に、もときた道をたどつて山を駆けおりた。

道士たちは出迎えて方丈へ請こじ入れた。真人がさっそくたずねた。

「天師さまにお会いになりましたか」

「わしは朝廷の高官だぞ。そのわしを、よくも、山路を歩かせ、あんな苦しみをさせ、すんでのことで命をなくさせるような目にあわせたな。最初には、中腹まで登って行くと眼の吊りあがつた白額はくがくの虎が躍り出て、わしはびっくりして生きた心地もなかった。ついで山の鼻にさしかかったところで、草叢くさそうのなかからぬつと真白な大蛇が出てきてとぐろを巻まき、わしの行いくつてをふさいだのだ。わしに運があつたればこそで、なければ生きて東京へ帰かへることはできなくなつたらう。みなおまえら道士たちが本官を愚弄ぐろうしての仕業じゃ」

「わたくしどもが、どうして、ご大官をあなどつたりなどいたしましやう。それは祖師さまが、太尉どののお心のためされたのでございませう。お山には蛇や虎がおりはしますけれども、決して人を傷つけるよ



張天師 祈つて瘟疫を禳う

うなことはいたしませぬ」

「わしはもうほとんど歩けなかったのだが、なおも坂をのぼって行くとすると、松の木のアたりからひとりの童子があらわれ、黄牛に乗って鉄笛を吹きながらやってくるので、どこからきたのか、わしを知っているかとたずねてみると、童子は何もかも知っているといい、天師さまは今朝早く鶴に乗り雲を駆って東京へ行くといわれたとのこと、それでわしはもどってきたのだ」

「それはおぬかりなされました。その牧童こそ天師さまなのです」

「なに天師さまだと？ ひどくむさくるしい風態だったぞ」

「当代の天師さまはふつうのお方ではありません。年こそ若いが道

行の非凡な、たいしたお方なのです。あちらこちらであらたかな靈驗をあらわされますので、人々は道通祖師さまと申しあげております」
「わしは目を持ちながら気がつかず、みすみすお見それしてしまつたのか！」

「ご安心なさいませう。祖師さまが行くとおおせられましたならば、太尉のものがご帰京のところにはもう、祖師さまは星祭りをとどこおりなくすませておられますよう」

太尉はそういわれてやっと安堵した。

真人は宴席をもうけて太尉をもてなす一方、詔書を御書匣に収めて上清宮内に安置し、御香は三清殿で焚いた。その日方丈では盛大な饗応があり、酒盛りは夜までつづいた。その夜はここので宿った。

あくる日、朝食がすむと、真人をはじめ道士一同や提点、執事人らが、太尉を境内の参観に誘った。太尉は大いに満足の態で多くの人たちをひき従えて方丈を出た。

ふたりの童子の先導で、社殿のあちらこちら、さまざまの風物を賞でたのしんだが、ことに三清殿はえもいわれぬ豪華さ。その左の廊下には九天殿・紫微殿・北極殿。

右の廊下には太乙殿・三官殿・驅邪殿。それらをずっと見てまわり、やがて右の廊下の奥に行きついた。洪太尉が眺めると、そこにまた一棟の別殿があり、胡椒を搗きまぜた紅い土塀をめぐるせ、正面には二枚扉の朱塗りの格子戸があるが、その入口にはいかつい大きな錠がかけられて、扉のあわせ目には十数枚の封じ紙がはられ、封じ紙には嚴重にいくつも朱印が押してある。軒には紅の漆地に金文字の額があつて、そこに書かれた四個の金